

平成18年 5月2日	<b>農作物病虫害発生予報</b> <b>5月</b>	山口県病虫害防除所 山口県農業試験場
---------------	--------------------------------	-----------------------

～目次～

予報の概要	1
予報	
【主要病虫害】	2
【その他の病虫害】	6
病虫害・農薬情報	
病虫害メモ - トマト黄化葉巻病の発生拡大防止	7
農薬メモ - ポジティブリスト制度とは?	8
参考	9

予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
麦類	赤かび病	やや多	-	-
カンキツ	かいよう病	多	多	多
ナシ	黒斑病	平年並	平年並	前年並
果樹全般	カメムシ類	やや多	-	-
タマネギ	べと病	平年並	平年並	前年並
	軟腐病	やや多	やや多	多
チャ	クワシロカイガラムシ	平年並	平年並	前年並

作物	担当者
普通作	野崎(病害) 中川浩二(虫害)
果樹	藤村(病害) 殿河内(虫害)
野菜	岡田(病害) 岩本(虫害)
茶	中川浩二(病虫害)

# 予報

## 【主要病害虫】

### 麦類

- 1 赤かび病  
(1) 予報内容

予想発生量	防除時期	本年の出穂期
やや多	1回目：開花最盛期 2回目：1回目の防除後7～10日 3回目：2回目の防除後7～10日 本年の防除時期の例は下表参照のこと	本年の出穂期は5～10日遅い 山口市大内（農試）の11月15日播種 農林61号 4/25（平年4/15） ニシカサ 4/21（平年4/12） 秋コイミ 4/18（平年4/11） 伊ハノシ 4/12（平年4/7） アサコ-ルト 4/14（平年4/8）
用語の解説：「開花最盛期」は通常「出穂期」の5～10日後であるが、本年は、「出穂期」の7～10日後頃になると考えられる。「出穂期」とは全体の茎の40～50%が出穂した時期である。		

- (2) 予報の根拠  
 ア 気象予報では、5月の降水量は平年並みである（±）。  
 イ コムギの出穂期が7～10日程度遅れたため、収穫期が梅雨入り後になる可能性がある（+～±）。

- (3) 防除対策

#### <防除判断>

開花最盛期とその後7～10日おきの合計3回の防除を基本とする。

#### <防除のポイント>

- ア 本年はムギ類の生育が遅れているため、下表を参考にして適期に防除する。  
 イ トップジンM剤は、成分（チアネートM剤）を含む総使用回数が「出穂期後は1回」に変更になったため注意する。

表 11月15日に播種したほ場の本年の出穂期と防除時期の例（山口市大内）

品種	本年の出穂期	本年の防除時期		
		1回目	2回目	3回目
農林61号	4月25日	5月2日	5月9日	5月16日
ニシカサ	4月21日	4月28日	5月5日	5月12日
秋コイミ	4月18日	4月25日	5月2日	5月9日
伊ハノシ	4月12日	4月19日	4月26日	5月3日
アサコ-ルト	4月14日	4月21日	4月28日	5月5日

注) 本年は、出穂期から開花最盛期までの日数が長くなっているため、出穂期後7日を開花最盛期とした。

## カンキツ

### 1 かいよう病

#### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	5月上旬 5月下旬

#### (2) 予報の根拠

ア 3月下旬の越冬病斑調査では、発生ほ場率は36.4%（平年19.5%）、発病葉率6.0%（平年1.9%）で平年に比べ多かった（+）。

イ 気象予報では、5月の気温は平年並みか高い（+～±）。

#### (3) 防除対策

##### <防除判断>

春枝の感染防止には、5月上旬の春葉展葉期、5月下旬の春葉成熟期の防除が有効である。

##### <防除のポイント>

ア 発病している葉や枝は可能な限り取り除く。

イ かいよう病にかかりやすい品種（アマナツ、イヨカン等）や苗木、前年発生の認められた園では、必ず防除を行う。

ウ 無機銅水和剤を散布する場合は、薬害軽減のため炭酸カルシウム水和剤（クレフノン）200倍を加用する。

エ 薬害防止のため、新梢伸長期及び高温期のICボルドー66Dの散布は避ける。

## ナ シ

### 1 黒斑病

#### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	小袋かけ前 小袋かけ後

#### (2) 予報の根拠

4月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%（平年18.0%）、発病葉率0%（平年0.3%）で平年並みであった（±）。

### (3) 防除対策

#### < 耕種的防除 >

病芽は見つけしだい取り除く。また、せん定枝には病芽や枝病斑が付いたままなので、園外に持ち出して早急に処分する。

#### < 防除のポイント >

ア 小袋かけ前は黒斑病の重点防除時期なので、ていねいに散布する。

イ 薬剤散布後はできるだけ早く小袋かけを行う。

ウ ポリオキシシン剤及びロプラ - ル剤は県内全域で耐性菌が発生しているため、年1回程度の使用にとどめる。

## 果樹全般（モモ、ウメ）

### 1 カメムシ類（チャバ 初カメシ、ツアカメシ、クサキ カメシ）

#### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	-	-	園内での飛来確認時

#### (2) 予報の根拠

ア クサギカメムシの越冬量調査（隙間トラップ6カ所）では、1トラップ当たり6.8頭（前年1.5頭）で前年に比べ多かった（+）。

イ 果樹カメムシ類の越冬量と相関の高い前年のスギ、ヒノキの花粉飛散量は、過去9年で最も多かった平成13年と同程度であり、越冬量は多いと考えられる（+）。

#### (3) 防除対策

#### < 耕種的防除 >

常発園では、ネット（網目4mm以下）で園全体を覆い侵入を防ぐ。

#### < 防除判断 >

5月は気温の高い昼間に飛来することも多いので、モモ、ウメなど幼果期にあたる園では、特に平均気温20 以上となる気温の高い日は、園内や付近の灯火を観察し、飛来を確認したら防除する。

## タマネギ

### 1 ベと病

#### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病確認時

(2) 予報の根拠

4月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は5.0%( 平年15.2%)、発病株率は0.1%( 平年1.7%)で平年並みであった(±)。

(3) 防除対策

< 耕種的防除 >

越年り病株は抜き取り、ほ場外に持ち出し、土中に埋めるなどして処分する。

< 防除のポイント >

ア 二次感染株が確認された場合は、治療効果のある薬剤(リドミルMZ剤、リドミル銅剤、フォリオブラボ剤、カーゼートPZ剤、ホライズン剤等)により直ちに防除を行う。

イ 耐性菌出現防止対策として、上記の薬剤の使用は作付け期間中1回程度にとどめ、二次感染株の認められないほ場では上記以外の薬剤で予防防除を行う。

2 軟腐病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	発病確認時

(2) 予報の根拠

4月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は15.0%( 平年4.8%)、発病株率は0.4%( 平年0.4%)で平年に比べやや多かった(+)

(3) 防除対策

< 耕種的防除 >

発病株は抜き取り、ほ場外に持ち出し、土中に埋めるなどして処分する。

< 防除のポイント >

発病が確認された場合は、発病株を抜き取り処分し、発生が拡大するようなら、スターナ剤、バリダシン剤等により防除を行う。

チャ

1 クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

予想発生時期	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	ふ化最盛期

(2) 予報の根拠

ア 気象予報では、5月の気温は平年並みから高い(+ ~ ±)。

イ JPP-NE Tのクワシロカイガラムシ発生予察システムから予測されるふ化最盛期は5月30日( 平年5月31日)である。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

クワシロカイガラムシの幼虫が成虫の貝殻から出てくるふ化最盛期に薬剤防除を行う。

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想 発 生 量	現 況		発生ほ場率		備 考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	イネミズ ゾウムシ	平年並	平年並 (予察灯)	前年並 (予察 灯)	-	-	成虫移動最盛期(平年に比べ遅い) 平坦部：5月中旬 中山間部：5月下旬 成虫密度が100株当 たり50頭未満であれば 防除は必要ない。
詳しくは山口県農林業情報システムを参照のこと							
カンキツ	そうか病 黒点病	平年並 平年並	- -	- -	4.6 -	12.0 -	枯れ枝を除去する
ナシ	黒星病	平年並	平年並	前年並	0	0	
タマネギ	ボトリチス属 による葉枯症(白 斑葉枯病)	やや少	やや少	前年並	0 -	13.4 -	

#### トマト黄化葉巻病の発生拡大防止

トマト黄化葉巻病はトマト黄化葉巻ウイルス Tomato yellow leaf curl virus (TYLCV)による病気で、世界的にみると最も被害が大きいつまとのウイルス病です。本県では本年1月に旧下関市において初発生が確認されました。

トマト黄化葉巻ウイルスはシルバーリーフコナジラミやタバココナジラミバイオタイプQが媒介し、成虫や幼虫が感染植物を吸汁することで、ウイルスを体内に取り込み伝搬能力を獲得します。感染したつまとは新葉が葉縁から退緑しながら葉巻症状となり、後に葉脈間が黄化し縮葉症状となり、症状が進むと生長点付近で節間が短縮します。発病後は開花しても結実しないことが多く、大きな減収となります。

トマト黄化葉巻ウイルスはつまとの他ミニつま、インゲンマメ、トルコギキョウ、ペチュニアに感染・発病し、ピーマン、ジャガイモやノゲシなどの雑草に無病徴感染します。

本病は汁液伝染や種子伝染、土壌伝染せず、コナジラミによって容易に伝染されるのでシルバーリーフコナジラミなどの防除対策が重要となります。既発生地域では、シルバーリーフコナジラミの侵入や拡散を防止するため、ハウスの開口部に0.4mm以下の目合いの防虫ネットを設置し、定植時や育苗時に粒剤を施用します。ハウス内でシルバーリーフコナジラミなどの発生を認めたら薬剤防除を徹底して密度低下に努めます。また、り病株は抜き取り、土中に埋めるなどして処分します。また、シルバーリーフコナジラミなどの発生源を除去するため、ほ場内および周辺の除草を徹底します。収穫終了後は直ちにハウスを密閉して株を地際から切断または抜根して、シルバーリーフコナジラミなどをハウス内で死滅させます。

未発生地域では、黄色粘着トラップを設置してシルバーリーフコナジラミなどのモニタリングを行い、本病の侵入警戒に努めます。また、購入苗を導入した場合には、シルバーリーフコナジラミなどの発生や本病の発生に注意します。

未発生地域で本病と思われる症状が認められた場合は、病虫害防除所まで連絡をお願いします。

( 専門研究員 藤村寿祐 )

### ポジティブリスト制度（5月29日から施行）とは？

現行の食品衛生法では、一部の「残留農薬基準」があるものに限って、その基準を上回る農産物等の流通が禁止されていますが、残留基準が設定されていないものについては、原則、規制の対象外となっています。ポジティブリスト制度では、国内外で使用されている農薬のほとんどすべてについて残留基準が設定され、「残留農薬基準」を超える食品の販売等が禁止されます。この制度の導入によって全ての作物について、原則、残留基準が設定されることとなり、残留基準値を超えた場合には、流通できなくなります。具体的には、農薬の適用がない作物に「飛散（ドリフト）」した場合や「防除器具の不洗浄」などが原因で「残留農薬基準」を超える場面が想定され、出荷規制等の問題が生じることが危惧されます。そのため、以下の対応策が必要です。

- 1 農薬使用基準を守る（農薬のラベル内容を確認し、適正に散布する）
- 2 農薬散布時には、近接ほ場で栽培されている作物への飛散を防止する
  - (1) 散布量が多くなりすぎないようにする
  - (2) 風の弱いときに風向きや散布方向に気をつけて散布する
  - (3) 周辺の作物にも登録のある農薬を使用する
  - (4) 粒剤など飛散しにくい剤型の農薬を使用する
  - (5) 境界区域に農薬を散布しない区域を設定する
  - (6) まわりの作物をシートなどで遮蔽したり一時的に覆っておく
  - (7) 発生予察情報の利用により、必要最小限の農薬を使用する
- 3 散布器具に前回使用した農薬が残っていないか確認する（散布器具を洗浄する）
- 4 農薬の使用状況を記録し、保管する

#### 用語の解説【残留農薬基準】

ポジティブリスト制度における残留農薬の基準には、「残留農薬基準」、「暫定基準」、「一律基準」の3つの基準がありますが、表現として“暫定”、“一律”としているだけで、規制については食品規格に定める基準であり、「残留農薬基準」とは差異がありません。

- 1 残留農薬基準：すでに食品衛生法により設定されている基準値をそのまま適用
- 2 暫定基準：国際基準、農薬取締法に基づく農薬登録保留基準、欧米の基準を参考に暫定的に設定した基準値を適用
- 3 一律基準：国内外の基準が設定されていないもの（上記1、2以外）は、一律0.01ppmという低い数値を適用

（専門研究員 野崎 匠）



## 参考

### 1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

（注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	前年の評価より少ない発生
前年並	前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

### 2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（5月28日福岡管区气象台発表）

予報	高い(%) 多い	平年並(%)	低い(%) 少ない
気温	40	40	20
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

週ごとの気温傾向

予報	高い(%)	平年並(%)	低い(%)
1週目	50	40	10
2週目	30	40	30
3～4週目	30	40	30

### 3 5月のテレホンサービスの内容(予定) TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	5月の発生予報、イネ病害虫の防除、ムギ病害虫の防除、カンキツかいよう病の防除、ナシ黒斑病の防除
中旬	イネの補植用苗の処分、ムギ病害虫の防除、ナシ黒斑病の防除、タマネギ病害の発生状況と防除
下旬	イネいもち病の発生状況と補植用苗の処分、イネの本田初期害虫の防除、野菜の害虫の発生状況と防除、カンキツ病害虫の防除、トマト黄化葉巻病対策